

2025年6月22日 聖霊降臨後第2主日 ルカ 8:26～39 「あなたの家に帰りなさい」

今日私たちはゲサラ人の地方で悪霊に取り憑かれた男と出会います。このストーリーはマルコとマタイにも共通ですが、マルコでは悪霊に取り憑かれたのはルカ福音書と同じゲサラの人となっています。

ゲサラという場所は「レギオンが豚に乗り移り、走って崖から飛び降りて、溺れ死んだ」と言われるガリラヤ湖から50 kmほど離れています。そのためかマタイでは悪霊に取り憑かれた人はガリラヤ湖から、10 kmほど離れたガダラの人と書き換えられています。またルカ福音書の資料となる、写本のいくつかも、ゲルゲサとしているものがあります。

ゲサラという町の繁栄は、発掘された出土品で裏付けられています。紀元後1世紀に東西貿易で盛んに用いられた「王の道」沿いにあるゲサラは、1世紀半ば急に栄えます。そこに「レギオン」が関わってきます。「レギオン」とは本来6000人で作られるローマの軍団の名前です。ローマ皇帝はこの交易路の要衝に関心を持ち、ゲラサの近くにレギオン第10軍団『海峡隊』が駐留していました。

軍団は紀元後67／68年ガリラヤ占領に参加し、翌年はエルサレムに進軍して占領を行います。そして反乱軍を鎮圧して、属州の治安維持の任務に就きました。これがローマユダヤ戦争です。

この勇猛果敢な第10軍団のシンボルが雄豚であり、その姿は今、発掘された、煉瓦やタイルの押し型、貨幣の刻印、印章に残されています。ユダヤ人にとって豚は穢れた生き物であり、それを旗頭とする占領軍は、ユダヤ人にこの上ない不快な存在であった事は、疑いようありません。

ゲサラの悪霊祓いの物語は逆転の物語です。穢れた霊の名前がレギオン＝ローマの軍団であり、その圧倒的な力を誇るレギオンが、突然にどこからともなく現れた、武器を持たないさすらい人の

主に、「どうか底なしの淵へ行けとお命じにならないように」と願う所に、人々は喜びました。

イエスさまがこの「悪霊に取り憑かれた男」と出会った時には、彼は長い間、衣服を身に着けず、家にも住まず墓場を住まいとしていました。この人は本来の自分の居場所を失い、人としての尊厳（衣服）も長い間失っていました。悪霊（レギオン）が彼に取り憑いていたからです。レギオンが、この人からすべてを奪いました。これはまさにゲラサの町に駐留していた軍団＝（レギオン）が、この町の人たちに行ってきた悪行とびつたと重なります。

「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。頼むから苦しめないで欲しい」

イエスさまを見るとひれ伏して叫んだこの人の言葉は、普段は支配者の手下である軍団に対する、ゲラサの人たちの心からの声です。それを今レギオンに取り憑かれたこの人が、主に向かって大声で叫びます。

「この人は長い間、汚れた霊（レギオン）に取り憑かれていたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを壊し、悪霊によって荒れ野においやられていた」

ローマに逆らう者は、実際に鎖で繋がれ、足枷をはめられて、牢獄に入れられていた事でしょう。また軍団によって町から追放された人たちも数多くいます。

ゲラサの人たちだけでなく、イスラエルの民はみな駐留軍である「軍団」レギオンが滅亡することを熱望していました。それが実現しました。それも「豚に悪霊が乗り移って、溺れ死ぬ」という、雄豚をシンボルとする海の戦いで名を上げた「海峡隊」が、惨めに滅ぶ終わりかたで。

<悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出

してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。

>

イエスさまの力によって悪は滅びます。けれど目の前のレギオンを一旦追い払っても、支配者は滅んではいません。ローマ帝国から次の軍団が必ず再び攻め込んで来る。だからゲラサ人はすぐ「イエスさまに自分たちのところから出て行ってもらいたい」

と願ったのは当然の事です。再び送られて来るローマ軍団の報復に巻き込まれてはたまりません。

悪霊から解放された男は、舟でゲラサを去ろうとするイエスさまに、自分も着いて行こうと願います。しかし主は彼に言いました。

「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」

これは今回の責任を、すべてイエスさまが背負われた事を、ゲラサで語り継がせるためです。

「レギオンが滅んだのは町の人々の仕業ではない。一人の流れ者が来て不思議な力で、あの強力な軍団を自滅させたのだ」

そして実際に 70 年、本格的にユダヤ戦争が起こった時には、多くのローマ軍が支配するヘレニズムの町で、そこに住むユダヤ人たちへの虐殺が起きました。しかしゲラサはこれを免れます。

「ゲラサ人たちは中に残っている（ユダヤ）人たちに対して過ちを犯さなかった。そして出て行くことを欲した者たちを境界まで見送った」

このように歴史家ヨセフスは『戦記』に書き残します。ゲラサの人たちが、他のデカポリスの反乱とは、距離を取っていた結果が、このように歴史に残されたのです。

私たちが聖書を読むと人の生きる現実には、直接イエス・キリストが介入する場面と出会います。それが歴史として書き残され、また様々な新たな考古学的発見によって、私たちに新しい視点が開

かれて行きます。

イエス・キリストは私たちを解放へと導かれます。けれど国家は、民を管理する方向に進みます。

私たち教会は、イエスさまの解放の働きを受け止め、共に歩もうとしているでしょうか。それとも

体制が求める「正しい生活」を押しつけて、人を管理する権力の手先となっていないでしょうか。

聖書を読んでいく中で、私たちはいつも悩み苦しむ人とともにある、イエスさまの姿を見失わず、

主に従っていきたいと心より願います。主によって癒された者たちは、愛する場所にやっと帰るこ

とが出来ます。愛する人たちと暮らす事が出来ます。教会は帰る家として建っているでしょうか。

「悪霊からの解放」は「悪霊に取り憑かれていた人」が、再び共同体に迎え入れられるための大

切な行いです。エクソシストは聖霊の力によって多くの人たちを解放し、共同体に力を回復させま

した。けれど中世「魔女裁判」によって、多くの罪ない人々を裁いて来たのも教会です。

イエス・キリストの愛によって、教会がいつも人を癒して、多くの人を招き入れることが出来ま

すように。人を裁く過ちを、私たちが再び繰り返すことがないように、私たちをお守り下さい。

主が命じられた「あなたの家に帰りなさい」という言葉にあるように、苦しむ人が本当の自分の

家を見つけ出し、家に帰って安心して自分の愛する者たちと、平和に暮らす事が出来ますように。

主よあなたの聖霊を送って、私たちをお導きください。

望みの神が、信仰からくるあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、

あなたがたを望みにあふれさせてくださるように。アーメン